大谷學報　第十一卷　第三號（西藏佛教研究號）

# 西藏佛教の由來と其價値

松本文三郎

## 一

西藏には古から嚴密なる意義に於ける歷史なるものがないのであるから、佛教の傳來に關しても甚だ曖昧たるを免れぬ。元來西藏では、支那唐時代（西曆六〇〇年代の中葉）に至る迄は、歷史以前に屬し、未開野蠻の民であり、殆んど何等の文化をも有せなかつたものである。それ故に、舊唐書（卷一九六）吐蕃傳にも、「吐蕃（卽ち西藏）は本と漢の西羌の地なり、其種落出づる所を知る莫きなり」ともいひ、又「或云、南涼禿髮利鹿孤の後なり」ともある。而して此に樊尼なるものあり、他國を蠶食し、土宇廣大、勝兵數十萬、遂に姓を改めて窣敦野（又悉補耶、通鑑の註には敦悉野とある）となり、禿髮を以て國號となす、吐蕃（Thubphod）はその訛であるといふ。更らに其文化に就いては「文字なく、木を刻み、繩を結び約をなし、大氈を張り、其下に起居し、牛羊を養ひ、乳酪を取り食に

供し、兼ねて毛を取り褐を爲り衣る。曆日なく、麥の熟するを以て歲首となす、或は畜牧に隨ひ其居を常にせず。貴人は大氊張に處り、寢處汚穢、絕えて櫛沐せず、手に接して酒を飲み、氊を以て盤となし、麨を捻じて椀となし、實るに羹酪を以てし、幷せて之を食ふといふ、その文化の程度推して知るべきである。

尙ほ西藏には佛敎渡來以前ボン(Bon-p)と稱する宗敎が行はれて居た、これは古代此等の地方一帶に信ぜられたシャマン敎の一種である、唐書にも「多く羝羝の神に事へ、人は巫覡を信ず」とあるもの恐らく是れであらう。ボンの語原は不明であり、唐書に羝羝の神とあるものも、果して如何なる神を意義するか判らぬ。字書によれば羝は野生の羊、山羊をいふ、羝とは牡羊であるといふ。或は彼等は本牧羊の種屬であつたから、羊を以て其神となしたのかも知れぬ。ボン敎は佛敎渡來以後王命によつて禁止せられたが、後世或は西北印度地方の溫婆敎と混和し、或は佛敎と融合し、永く民間に流布したのである。ボン敎は勿論其初に於ては何等經典の書寫せられたものはなかつたのであるが、宛も支那の道敎が佛典に倣ひ諸種經典を作れるが如く、ボン敎徒も山間に遁れ私かに佛典に擬し諸種の祕密經典を造り、之をボンの祕寶と稱したといふ。それ故に今存するボン敎は固より古代の面目を其儘に傳へたものではなく、其佛敎に相似たるものは、皆後世敎徒の附會した所である。

西藏の傳說によれば西曆三百年の末若くは四百年の初にラ・トトリ・ニャンツァンなるものあり其國を領す、其八十歲の時天上より一寶筐が降下した。啓いて之を見れば、其中莊嚴經と金塔、寶珠鉢等を收む、これが彼國佛經傳來の始めであるといふ。ロックヒル氏は其佛傳（二一〇頁）に於て此傳說に就きいふ、莊嚴經なるものは元來支那若くは印度に於て特に尊崇せられた經典ではない、而してニポール人は尤も之を尊び、之を愛誦して居る。此等の點からして考ふるに恐らくニポール人の偶〻之を西藏に將來したものであらう。後日スロン・ツァン・ガムポ王が佛敎を國內に傳播せしめんとするに當つても、先づ人をニポールに派し、佛典を學ばしめ、又彼等が西藏に歸る以前既に此經を艾譯したといふに見ても、容易に之を推測し得るのであると。ニポールには當時佛敎の盛に行はれたことゝ思はるゝから、ロックヒルのいふ所も或は事實であり、何人かゞ同國から西藏に迄此等經典佛具を將來したかも知れぬ、しかし此傳說が果して事實であつたか否は大なる疑問であり、容易に信を置き難いのである。又假令ひ偶〻經典を將來したものがあつたとしても、當時西藏には文字も未だ製造せられなかつたのであるから、翻譯は勿論、此等佛敎々理の理解せられた筈はないだから果して其事實があつたとしても、之を以て西藏國に於ける佛敎傳來の始めとなすには足りぬのである。

ト・トリ王より四代、一百二十年を經て、西藏建國の祖とも稱すべきスロン・ツアン・ガムポ王が出世した。王の時からして西藏は眞に歷史時代に入り、佛敎亦此時を以て西藏に傳來したのである。

二

スロン・ツァン・ガムポは支那に棄宗弄讚（又棄蘇農贊等）といふもの卽ちそれであり、彼は有爲勇悍にして隣國を併呑し、其領土は遠く北の方于寘にも達したといふ。彼始めニポール王女を娶り其妃となしたが、其後突厥や吐谷渾の諸蕃が何れも支那よりして公主を迎えたるを見、貞觀年間屢〻使を遣はし金寶を奉し通婚を求めた。唐の太宗は始め之を許さなかつたが、遂に貞觀十五年（西曆六四一年）宗室の女を以て文成公主に封じ、之を王に與ふることゝした。これが抑々西藏國に佛敎を輸入し、又支那文化を移植するに至つた始となつたのである。傳ふる所によれば文成公主の將さに西藏に赴かんとするや、太宗に請ふていふ、西藏には未だ佛敎の行はるゝあらず願くは佛像經卷幷びに天文醫藥の書を賜はらんことをと。太宗公主の願ふ所を許し、尙ほ西藏は貧國なるを以ての故に巨萬の金銀を授けたといふ。是れが實に佛像經卷の彼に傳はつた始めである。勿論是れより先きニポール王女の西藏王に嫁するに當つても、王女は阿閦佛、彌勒、多羅檀像、其他寶珠瑠離等を將來したともいふ。當時ニポールに於ても佛敎頗る盛ではあつたが、彼にあつては佛敎も次第に婆羅

門教と混じたのみならず、ワッデル（喇嘛教二〇頁）のいふ所によれば、現存するニポール王の碑文等に見ても、彼王室に果して佛教の信仰ありしや否甚だ明らかならず、其碑文の一には濕婆教リンガ崇拜に關するものすらありといふ。是れに由つて考ふるに王女が佛像を西藏に將來したことは事實であるとしても、西藏王をして佛教を信ぜしむる程熱心なる信者であつたか否は容易に知るべからざるのである。之に反し當時の支那は佛教極盛の時代であつたから、公主も必らず篤く之を信じたに相違ない。のみならず公主の背景をなした支那帝國は、ニポールの比ではなく、其文化亦同日の論ではない。で公主の片言隻語も西藏國主に對しては千鈞の重をなしたことも事實である。是故に唐書にも始め公主の西藏に至るや、國王親しく部兵を率ゐ出でて之を道に迎え、大國の服飾禮儀の美を歎じ、俯仰愧沮の色あつたといひ、又公主と共に其國に歸るや、所親に謂つていふ、我が父祖未だ上國に通婚するものあらず、我今大唐の公主に尙するを得たるは幸實に多しとなす、當さに公主の爲め一城を築き以て後世に誇示せんと、遂に城邑を築き、棟宇を立て之に居らしめたともある。又公主は西藏人の赤土を以て其顏面を塗ることを好まざるや、國王は直ちに人民に令して之を禁止せしめた。此等の事實は如何に公主が國王に對し大なる勢力を有したりしかを知るべきである是故に西藏の歷史家も、支那公主を以て佛教に於ける西藏人の指導者であつたともいふ。勿論ニポール王女も自からは熱心なる信者でないとしても、又彼女は國王に對し大なる勢力を有しなかつた

としても、佛教の思想には幾分親しみを有つて居たことゝ思はるゝから、多少外部から之を援助したこともあつたであらう。がしかし壯年の西藏王をして佛教に誘入せしめたのは、主として文成公主の力であつたことは殆んど疑を容れないのである。で後世西藏人は國王を觀音の、而して其兩妃を觀音の女性たる多羅の化身となし文成公主を白、ニポール王女を綠多羅として之を尊崇するに至つた。

## 三

スロン・ツァン・ガムポが文成公主を迎えてからは、其將來した佛像を安置すべき殿堂を建立したのみならず、或は酋豪の子弟を支那に游學せしめ、之をして其國學に入つて詩書を學ばしめ、或は支那の學者を聘し、政事報告の文を作らしめ、或は蠶種幷びに麥苗を取寄せ酒、水車乃至紙墨の制法を學ばしめ、或は曆を輸入したる等、鋭意文化を移植せしむるに怠らなかつた。が王が西藏文化幷びに佛教輸入に對しなしたる最も大なる功績は、實にその文字の制定にあつた。これは實に國家に於ける文化的施設として最も緊要なるのみならず、或は支那や印度の如き當時の文化國を始めとし、ニポール、コータン等附近の諸國との交渉に當つても、又佛典の翻譯に際しても、其最も急を要するものたるは言ふ迄もない。で彼は大臣の子 Sauibhota 等十六人の青年子弟の秀雋なるものを

撰拔し、西北印度カシミーラに至り梵語を研究せしめた。彼等は此に留まること七年（或は四年ともいふ）業卒つて歸國するや、直ちに其學ぶ所のカシミーヤ文字を基とし、西藏の語韻を參酌し新文字、子音三十、母音四字を制定し、之に添ゆるに聲字註釋幷びに文法書を以てし、國内の學者をして洽ねく之を學ばしめたといふ。尚ほ彼は印度留學中諸種の佛教經典をも蒐集し、其後印度ニポール諸國より請聘した學者と共に多少佛典の翻譯に從事せしめたやうであるが、當時佛教思想始めて傳はつたことであるから、其翻譯も到底完全を得なかつたと見へ、當時に成れる反譯經典は今全く存せぬのである。

尚ほ西藏の傳說に據ればスロン・ツァン・ガムポ王は文成公主を迎えた以前、既に佛教に歸依したとか、或は彼は西藏國が世界の中心であるから、之を佛教の根本道場たらしめんと企劃し、其都城ラッサの郊外四方に寺院四處、中心に四所、國境四隅に四所等、其他都合百八所の寺院を建立せりといひ、或は彼自から觀音の功德を讃歎したる書を著はせりといふが如き、何れも皆信ずるに足らざることである。しかしながら西藏國に於ける佛教の幼芽を移植し、又後世流布の基礎を成したる點に於て吾人は彼を以て西藏佛教の開拓者と稱して差支ないのである。

斯くスロン・ツァン・ガムポ王は西藏國に始めて佛教の種子を移植したとはいへ、當時未だ寺塔の建立せらるゝあらず、僧團の組織せらるゝものもなく、民間には依然としてボンポ教獨り盛に行は

れたのである。佛教の廣く西藏國内に傳播せらるゝには、尙ほ數十百年の豫備時代を經過せなければならなかつたことは、之を支那や我邦の例に見ても秋毫怪しむに足らないのである。

スロン・ツァン・ガムポ王の沒してより後約五十年、支那唐の景龍三年（西曆七〇九年）には西藏國王亦使を遣はし、支那に通婚を求めた。時に中宗は雍王守禮の女を以て金城公主となし之に妻はす。金城公主と西藏王 Agtsov との間に一子を生む、チ・スロン（Khri sron）王が卽ちそれである。チ・スロン王の時代には宛も支那に安祿山の亂あり、肅宗蜀に矇塵するの已むなきに至つたので、西藏では支那の力を外に用ゆべからざるに乘じ、諸州を蠶食し、其都城を侵すこと數を知らず、西藏の國威は此時を以て最も發揚したのである。而して他面國内では佛教の流布に對し頗る熱心なるものがあつた、これも恐らく其母金城公主の感化によるものであらう。當時西藏國に於ては、宛も我邦聖德太子時代の物部、蘇我兩氏の如く、大臣二派に分れて、排佛と信佛と互ひに相爭ふて居たのである。是に於て王は斷然意を決し、排佛の黨を殺し、之によつて國論の統一を計り、而る後印度よりして蓮華生（Padma-Sambhava）等の高僧を招聘し、佛法の流布に努めしめた。蓮華生は實に西藏に於ける佛教僧團の始めをなしたものであり、喇嘛教の根本祖師である。で後世西藏人は彼を以て西藏の佛となす。彼は鄔駄衍那の人といふ、西域記にも鄔駄衍那は大乘流行の地であるが、同時に祕密作法の民間に盛に行はれた所とある。而して彼は或は中觀派の學者といはれ、或は Tantra-yoga

の人とも傳へられて居る。彼は西藏に於てJantraを譯出し、又祕密儀軌を作つたといふ所を以て見ても、彼は恐らく中觀派に屬する密教學者であつたのであらう。而して是れが、又普通彼の學派のSva-tantra-madhyamika の名を以て稱せらるゝ所以でもあらう。傳說によれば蓮華生の西藏に來るや八種の惡魔變化を退治調伏したといふ。思ふに當時印度に行はれた密教は、大乘教中に婆羅門教を攝取したものである、而して此等の思想は西藏從來のボン教とも多少相近似する所から、彼は之をも佛教中に融和し來つたのではなからうか。佛教が此時遽かに民間に行はるゝに至つたのも、抑も亦之が主なる原因の一であらうと思ふ。勿論當時西藏王が他方にはボンポ教禁止の令を發しては居るが、西藏の上下を通じ數百年來奉じ來つた信仰を一朝にして革めしめ、悉く之をして佛教に歸依せしむる如きは到底不可能のことである、特にボンポの如き俗信より一擧中觀派の如き高遠なる宗教に移さしめんとするに於てをや。王が斯く命じたるは、當時喇嘛の說に何等か從來の信仰と一脈相通ずるものがなくてはならない筈と思ふ。何れにしても王はボン教徒に課するに極刑を以てしたるに關はらず、尙ほ依然として其信仰を改めざるものは、竊かに遁れて山間に隱れ、此に祕密教典を編纂したといふ、ボンの經典あるは實に此時から始まるのである。尙ほデ・ツアン王時代に注意すべきは、西藏佛教の根本道場たるサンエ(Sanyes)寺院の建立せられたことゝ、教團が組織せられ、西藏人にして出家したものゝあつたことであつて、西藏佛教も漸く王の時代に至つて其形を成

したのである。又梵藏對譯字彙として今日に至る迄學者の間に尤も珍重せらるゝ Mahâvyutpatti の編纂せられたのも、亦王の時であつたいふ。これは當時譯經事業の爲めの必要から作られたものではあるが、永く學界に寄與する所大なるものである。

## 四

デ・ツアン王は西藏國民を强迫し佛敎に歸せしめんとしたが、當時僧團の規律も未だ確立せず、ボンポ敎も全然之を禁遏するには至らなかつた。しかし佛敎は之より次第に民間に鞏固なる基礎を築いたものゝやうである。王沒してより二子兄弟相次ぎ位に卽き、唐の元和の十二年（八一七年）ラルパチャン（Ral-pa-chan）なるもの王位を繼承した。彼は睿知にして學術を好み、能く佛敎を保護しデ・ツアンの志を成就せしめた。彼は卽位の初、先づ支那西藏兩國間に於ける國境保全の盟約をなし、又支那の學者を聘し、年を逐ふて國內の事件を註記せしめた、西藏に歷史あるは實に此に始まるといふ。其他支那より度量衡を輸入し、商人の詐僞的行爲を矯正し、國政を一新した。彼は又寺院を建立し、從來翻譯せられた經典の何れも未だ完美を得ざるを憾み、印度よりして學者を請じ、國內の秀雋なる僧侶と共に相協力して、旣に譯出せられた經典は之を訂正し、未だ譯出せられざるものは新たに原本よりして之を譯出せしめ、又業半ばにして之を卒るに至らざるものは之を卒へし

め、經典の內繁鎖にして重複する部分は之を削略せしめた。當時反譯せられた經典は實に莫大の數に上り、現存する西藏藏經の少くとも過半は皆王の下に成れるものと稱せらる。十萬頌の般若經を始めとし、無數の經典、乃至世親、聖天、月稱、龍樹、馬鳴等印度諸大論師の作論亦皆其中に包含せられた。

王は一方に於て斯く佛典翻譯の大業を成したと同時、他方には又僧團の革淸をも計劃した。從來西藏の僧團はボンポ敎の儀軌と相混じ、頗る不純であり、戒律も弛廢して能く行はれなかつたので王は佛法を流布せしめんと欲せば、先づ以て僧侶の身を以て範を示さなければならぬとなし、嚴に戒律を守らしめ、而して一般國民には此等淸僧によつて命せられた一切の規矩は、總べて之を遵奉すべきことを命じた。尙ほ彼は僧侶の俗事に煩はされず、專心佛法を修行するを得るが爲め、一僧毎に五家の租を給與し其用に供せしめたともいふ。斯くして純粹なる印度的(有部)佛敎僧團が西藏國に出現したのである。支那の歷史では贊府立ちて幾んど三十年、病みて政を視ず、事は總べて大臣に委任す、故に中國に抗すること能はず、邊境晏然たりとあるが、是れは事實甚だ疑はしい。彼は文化的君主であつて戰爭を喜ばず、邊境の晏然たることは事實であるが、其國內の施設に於ては大に見るべきものあるのみならず、特に佛敎に對しては、振古未曾有の大事業を成し、西藏佛敎の黃金時代を現出せしめたのである、彼は實に西藏の阿育王と稱しても差支ない。尙ほ支那の歷史に

は王を以て在位三十年といふも少しく事實と齟齬する。王の卽位は前述の如く元和十二年（八一七年）であり、彼が其國內反對黨の爲めに慘殺せられたのが、開成三年（八三八年）であるから、其在位は二十二年である。三十年の三は恐らく二の誤であらう。此點から見れば、後世西藏人が建國の祖スロンツアンガムポとデ・ツアンの二王とラルパチャン王とを併せ西藏の三大王となし、追慕措かざるものは、寧ろ當然であるといはなければならぬ。

## 五

ラルパチャン王は西藏史上前後無比の偉勳を奏したものであつたが、其晩年は實に悲慘にして言ふに忍びないのである。王の佛敎的大臣の卒するや、始め彼によつて王位を忌避せられた王の兄弟の一人たるランダルマは爾來殃々として樂まなかつたが、大臣の卒するを聞くや、時至れりとなし豫てより王の佛敎興隆に對し私かに不平を抱けるボンポ敎徒と協力し、且つラルパチャンには王位承繼者がなかつたので、二人の無賴漢をして王に迫り之を絞殺せしめ、自立して王となつた。支那史にも達磨は酒を嗜み、畋獵を好み、內を喜び、且つ凶慢少恩にして政益亂るとあるが如く、彼は啻に宗敎的信仰を有せざるのみならず、國家の文化的施設に對しても、何等の同情と理解とを有せなかつたのである。特に彼は佛敎に對しては極度の嫌惡の念を有し、佛敎の傳はつてから西藏國

王は常に短命であり、國内には惡疫流行し、風雨時に順はず、年穀熟せず、戰爭屢行はるゝに至つたとなし、其排佛的大臣と力を合せ、一切の僧侶は之を追放し、若くは還俗せしめ、寺塔經像は之を破壞し、或は之を水に投じ、或は火に燃き、或は岩穴に埋藏せしむ。斯くしてランダルマの卽位と共に西藏に於ける佛敎の僧侶經典並びに建築は一切之を破壞し、黃土に歸せしめたのである。ラルバチャンの苦心經營すること二十有餘年、デツアン王の佛敎興隆に志してから約一百年、佛敎も漸く民間に遍ねからんとして、忽ち又其根底から破壞せられたので、假令ひ少數の佛敎徒が其必然の結果を豫知し、或は身を以て國外に遁れ、或は經像を隱匿したものがあつたとしても、今後更らに之を復興せしむるには、異常の努力と歲月とを要したのである。西藏に於ける排佛が偶〻支那唐代武宗のそれ（會昌五年、八四五年）と殆んど同時にして相前後したるは、亦一奇と稱すべきである。但支那にあつては佛敎の流布既に久しく、假令ひ其間一時の廢佛毀釋ありとしても、之を復興せしむることは左程困難ではなかつた。が西藏にあつては事情大に之と異なるものがある、佛敎始めて興らんとしたのみで、民間には未だ鞏固な基礎もなく、經典の傳播亦遍ねからず、僧侶の數亦殆んど彼と比すべからざるのである。それ故に其復興は建設と殆んど同樣の困難を感じた。況んやランダルマの暴擧に憾を抱ける一愛宗護法の徒によつて其身首處を異にして以來、（王の暗殺せられた年は西藏の記錄によるも支那の記錄によるも明らかならぬが、何れにしても九百年代の初であつたら

しい）國內亂れ、小邦分立し、爭亂絕ゆることなきに於てをや。爾來一百餘年の間は、西藏は政治上にも暗黑時代を顯出したと同じく、佛敎亦暗黑時代に入つたのである。

## 六

ランダルマは後約一百年の間といへども、勿論印度西藏間僧侶の往來、經典の將來翻譯も多少ないではなかつたが、特に注意すべき價値を有せないのみならず、佛敎は次第にボンポ敎と混和し著しく其面目を異にしたものゝやうである。で千百年代の初ラ・ラマ・エシ・オド（Lha-Lama Yoše-ḥod）なるもの起り、王位に卽いてより、大に之を遺憾とし、國內の子弟の殊に穎雋なるものを擇び、特殊の敎育を施し、之をして印度に留學せしめ、歸つて後新たに僧團を形成せしめんと企てたが、彼等の多くは業半ばにして斃れ、其能く西藏に歸り來つたのは僅かに三人に過ぎなかつたので、其目的も自ら挫折する事となつた。彼並びに彼の沒後西藏の王位を繼承したチャーン・チューブ（Chân Chûb）は西藏佛敎を革淸せんが爲め、再三使を印度に遣はし高僧を求めしめた。其結果が現代喇嘛敎の眞の開祖とも稱すべきアチサ（Atiša）の來藏となつたのである。アチサの西藏に來るや全國を周遊し至る所純粹大乘の法を說き、從來の混濁せる僧團を革正し、之をして純粹印度的のものとなした。彼は嚴格なる戒律の維持者にして、其生活は簡素であり、態度風雅、人に接するに溫和であつたの

で上下を擧げて之に歸依し、人皆稱して佛の再來となしたといふ。アチサの門下亦其人に乏しからず、彼等は力を合せ戒律主義を鼓吹したが爲め、佛敎は日に隆盛となり、翻譯者亦續々として輩出した。王國は次第に分裂し、其勢力は日に縮少したが、何れの王も佛敎を信じ、經典の書寫、寺塔の建立頗る盛なるものがあつた。アチサは西曆千五十三年(或は五十五年といふ)七十三歳を以て入滅した。アチサの滅後一百餘年の間は、西藏の佛敎も極めて平穩に益其流布の範圍を廣めたものゝ如くである。但此に一言注意して置かなければならぬのは、アチサは斯く西藏の敎團を革淸し、之をして純粹印度的に復したといふものゝ、當時の印度敎團は瑜伽タントラによつて著しく着色せられたものである、で彼の敎團も亦固より一種類のものであつた、唯彼は西藏に於けるボムポ敎と雜糅せられた部分を排除したに過ぎぬのである。

降つて宋の開禧二年(西曆一二〇六年)元の太祖の起つて大蒙古國を建設するや、西藏は早くも彼によつて征服せられ、景定元年(一二六〇年)世祖の代り王となるや、喇嘛敎は此に不思議の運命に遭遇した。傳ふる所によれば世宗は其太子たりし時より、心を喇嘛敎に傾け、以爲らく西域の地新たに元に附す、其地廣くして檢遠、民は獷にして鬪を好む、其俗に因り其人を柔げんと欲せば、喇嘛敎を以て之に化するに如くなしと。是に於て彼は薩迦(又薩斯迦 Sa-skya)地方に於ける一青年喇嘛發恩巴(又拔思巴、八合恩八、Phags-pa)なるものを擇び、之を以て帝師となし、授くるに玉印を

以てし、全喇嘛教團の總統となし。啻に宗教上の全力を與へたのみならず、兼ねて又政治的全權を以てし、西藏をして元主の保護國たらしめた。斯くして四分五裂した西藏國も、再び統一せられ、喇嘛教は西藏のみならず、元國の領土には一般に廣布せらるゝに至つた。世祖は八思八を信ずること甚だ篤く、之を優遇する遙かに諸王の上に出でた。彼亦常に帝の左右に侍し、政治宗教の樞機に與かり、或は蒙古新字を作り、其文化を向上せしめ、其功亦實に大なるものありといはなければならぬ。世宗が斯く八思八を信任した所以のものは、恐らく八思八の人格の大に人に異なるものを認めたからであつたに相違ない。が草木子（卷四）には又次の話が傳られてゐる。「元の世祖既に天下を定め、從容として劉太保に問ふていふ、天下敗れざるの家なく、亡びざるの國なし、朕が天下後當さに誰れか之を得べきと。劉の曰く、西方の人之を得んと。世祖八思麻帝師の天下を平ぐるに佐け功あるを以て、意に其類當さに代つて天下を有つべしとなす、子孫長久の計をなさんことと思ひ、陰に其福を損し、其氣を泄さしめんと欲す。是に於て其爵を尊び、一人の下、萬民の上に至らしめ其費を豐かにし、東南數十郡の財も以て之を資するに足らざるに至り、其禮を隆にし王公妃主皆拜伏して奴隷の如くならしむるに至る。甚しきは授記をなす時には、地に藉くに髮を以てし、頂を摩するに足を以てし、馬溺子に代ゆるに眷を以てし、其卑賤を極む、其既に死するに及んでや、復西方に於て再び一人を請ひ、以て其位を襲がしめ、之に事ふること一に其制に遵ふ。其之を待つこと

斯の如くなる所以のものは、盡し虚しく其主貴の禮を隆にし、陰に其天下の福を消し、以て其國家の命を延べんことを冀ふ所以なり」と。是れ果して眞なりや否を知らぬが、世祖は一大政治家であつた、是れ亦必らずしも絶無とはいへないのである。免に角世祖以來歴代の元主は何れも喇嘛を優遇したので、喇嘛の非行日に益盛となり、庶民怨嗟の府ともなつたことは事實である、而して是れは亦元帝の私かに欲して居た所であつたかも知れぬ。元史の傳ふる所によれば、元代諸帝の佛事をなす、或は年數十回、或は一百數十回に至り、延祐四年(仁宗時代)毎歳内庭の佛事其費す所、片數を以てせば麪四十三萬九千五百、油七萬九千、酥二萬一千八百七十、蜜二萬七千三百といふ。其他寺塔の建立、金字藏經の書寫、造像の類、歴代相繼ぎ殆んど絶ゆることなかつたのである。で泰定三年(一三二六年)中書省からの上書にはいふ、世祖大宜文、弘教等の寺を建つ、當時院の虚費と號す。而して成宗復天壽萬寧寺を構ふ、之を世祖に較ぶるに用倍判增す。武宗の崇恩、福元、仁宗の承華、普慶の如き、祖搾入り所益又甚し。英宗は山を鑿ち寺を開き、兵を損し農を傷け、而して卒に益なし。夫れ土地は祖宗の有する所、子孫當さに共に之を惜むべし。臣恐る、後には之によつて口實となし、妄りに工役を興し、福利を徼へ、私欲を逞くせんことを、惟陛下之を察せよと。以て其一班を知るべきである。其他の非行に就いては餘りに淫穢にして言ふに忍びざるのである。勿論八思八は戒行純潔にして篤く衆人の歸依を得たものゝやうであつたが其勢力の餘りに大なりしが爲

め、末流次第に斯かる弊風を來せしものであらう。而して後世のダライ喇嘛は固より八思八と其法系を異にするものではあるが、其政教一致の制度は抑も彼よりして始まれるものといふべきである

七

以上余輩の略述する所によつて西藏佛教の由來は粗〻之を知ることを得たと信ずる。之を要するに現代の西藏佛教は西暦紀元後第十一世紀の初瑜伽タントラ派に屬するアチサの傳ふる所が基本となり、次第に變遷したものであり、其舊派と稱するものゝ如きは、畢竟佛教とボンポ教との著しく混和變形したものに外ならぬ。而して其經典は固より數百千年の間、內外幾多の學者の中に翻譯せられたものゝ自然に積聚した所ではあるが、其最も主なる部分は第九世紀の初ラルバチャン王の命によつて成されたものと、同第十一世紀の初アチサ並びに其門下によつて譯出せられたものとであつたことも始んど疑を容れないのである。今之を支那佛教に比較すれば其傳來並びに經典の翻譯に於て、共に數百千年を後くれたものであり、支那に於ける譯經事業殆んど終らんとしてから、西藏には漸く其事業が起つたので、佛典の譯場は支那から西藏に移動した如き觀があつたのである。

扨喇嘛教を實際宗教として觀察すれば、喇嘛學者が教義として主として學ぶ中觀や瑜伽は、既に支那にも傳來し、殊に支那にあつては一の宗派としてすらも成立して居るのであるから、別に珍と

するには足らぬ。其戒律も小乘有部律であるから、是れも早くから支那に翻譯研究せられて居る。唯其瑜伽タントラの說は、支那にも多少其經典の翻譯はあつたが、未だ一宗派として成立するには至らなかつた。又喇嘛敎は我邦の密敎よりも更らに後くれたのであるが、それは直接印度から輸入せられたのであるから、佛敎が印度に將さに亡びんとする際に於ける印度佛敎の狀態を見るに於て(假令ひ現時のそれが多少印度傳來以外の不純な分子によつて混濁せられ居るとしても)大なる興味を有するものである。但支那や日本の佛敎とは直接關係のないものであるから、我邦の佛敎者には餘り興味がないかも知れぬが、彼も亦印度佛敎の一つの流であり、特に印度佛敎の最後のページを占むるものとして觀すれば、佛敎史上少からざる價値を有するものといはなければならぬ。況んや支那や日本に於てのみならず、本國印度に於てすらも、其資料の既に亡び、全然ブランクとして存する所なるに於てをや。

更らに其經典に就いて之を考ふるに、西藏經典が支那に比し數百千年の後に譯出せられたものとすれば、經典史上の價値の遙かに支那のそれに劣れるものたるは言ふまでもない。が西藏々經は又支那の譯經に見るべからざる長處を有する、これが彼藏經の南北佛敎經典の中に於て、特殊の地位を占むる所以であり、又これが現時東西の學者の盛に之を研究するに至つた所以でもある。其所謂特殊の長所とは大體次の諸點にある。

（一）支那は由來文章の國である。文を作るには簡潔を尙び冗漫を嫌ひ、語は古の成語を取り、新たなる熟字を忌む、斯の如くにして其思想文脈の全然相異なれる印度の經典を譯出せんとする、亦實に至難の業といはなければならぬ。だから支那譯の佛典は經典に相應はしい典雅莊重は之あるが其意義の時あつては晦澁に陷いる弊がないとはいはれぬ。之に反し西藏經典は、宛も我邦の俗語體の文の如く、其原義の通り之を譯出し、文章成句の爲めに煩はさるゝことがない。而してその文の典雅や莊重の如何は秋毫之を問はず、簡潔と冗漫とは敢て之を論ぜぬのである。隨つて漢文の晦澁難解のものと、西藏文にあつては明了暢達を得るものがないではない。是れは今日よりして梵本の原義を知るに稗補する所少からぬのである。支那の學者にして經典の註釋を作れるものも少くないが、其譯文の現に意義不明なるものにあつては、或は想像を以て之を解釋し、又時としては其譯字に對する支那古來の歷史的意義によつて之を解釋するのであるから、時には頗る附會强辨に流れ、果して梵本の眞義を得たるか否疑はしいものもないではない。此等の點に於て藏譯の學者に稗益する所甚だ大なるものがあるのである。

（二）古代の經典であつても何故にか未だ支那に傳はらず、若くは既に一たび傳はつたものでも、譯出するに至らなかつたものが、西藏に於て飜譯せられたものもないではない。此等は支那に於ける佛敎文獻の缺を補ふべきであつて、貴重な資料といはなければならぬ。又既に支那に譯出せられ

たものであつても、藏譯と多少其文句の異同出入する所の存するものもある。其是非は別の問題であるが、或は其原本の本文に於て多少異なつて居たものもあらう、又或は支那譯の後世轉寫の際其文句の誤寫誤奪したのもあらう。支那經典の誤寫誤奪の少からぬことは、現行本と古寫本とを比較研究するものゝ何人も能く知る所である。で此等の點に於ても西藏佛典の研究は著しく學者に利益を與ふるものである。

(三)支那の飜譯事業は前にも一言した如く唐の中葉に至つて先づ斷絶したといつても差支ない。其後宋時代にも多少飜譯がないでもないが、それは殆んど九牛の一毛である。だから特に密教經典の比較的後世に成れるものにあつては到底之を支那譯に求むべからずして、寧ろ藏譯に於てのみ之を見得るのである。是も亦西藏々經の學者に取つて有益なる所以である。

以上の理由によつて西藏の佛教は宗教としても、將た經典の研究としても、現代の學者には稗補する所頗る大なるものがあるといはなければならぬ。此等の點からして最近東西の學者にして西藏佛教研究者の次第に多からんとするは、洵に余輩の佛教界の爲めに慶賀に堪えない次第である。